

論文

戦争によって海を渡った日本人

— 残留日本兵から日系インドネシア人へ —

伊藤 雅俊^{※1}Japanese Who Crossed the Sea by the World War II
— From Residual Japanese Soldier to Japanese Indonesian —Masatoshi ITO^{※1}

ABSTRACT

After ended World War II, a part of approximately 290,000 Japanese soldiers, estimated from 1,000 to 2,000 people remained in all over Indonesia and they took part in the Indonesian War of Independence with the Netherlands between 1945 and 1949 as the main battlefields with two islands Java and Sumatra. Even after Indonesia independence, there were Japanese who left behind in Indonesia. They lived in Indonesia by converting to Muslim, renaming to Islamic names and marrying Indonesian women. That is to say, they are the Japanese Indonesian first-generation.

This paper will describe how the Japanese Indonesian first-generation had lived in North Sumatra, Indonesia, focusing on the two aspects of marriage with Indonesian women and the Japanese associations formed in North Sumatra.

This paper is structured as follows. Firstly, to indicate the approximate number of Japanese soldiers left behind or the Japanese Indonesian first-generation in Sumatra. In addition to this, to show a wide ranged distribution of them in Sumatra.

Secondly, to examine marriage between Japanese Indonesian and Indonesian women while putting diversity of ethnic groups their spouses and their spouse selection into focus. Thirdly, to consider Japanese associations organized by Japanese Indonesian in some parts of North Sumatra in order to live by helping each other unitedly.

はじめに

日系インドネシア人とは、第二次世界大戦時にインドネシア各地に派兵され¹⁾、日本敗戦後も帰国せず、インドネシア独立戦争(1945/8~1949/12)に貢献、さらにインドネシア独立後も帰国の途を選択することなく、同国で人生を歩むこととなった残留日本兵(日系インドネシア人一世)²⁾およびその子孫(日系二世以降)のことを指す。

本稿では、日系インドネシア人一世³⁾らがスマト

ラ島北スマトラ州でどのように生きたのかを、現地人女性との結婚と日本人会の結成という2つの事柄から考察する⁴⁾。

これまで日系インドネシア人一世に関する研究はなされているものの⁵⁾、その多くがジャワ島の日系一世を対象とした歴史学的・個人史的研究であるのに対し、本稿はスマトラ島に生きた日系一世を研究対象とした民族誌的研究となる。

他方、ジャワ島はスマトラ島と並んで日系インド

※1 日本大学国際関係学部国際教養学科 助教 Assistant Professor, Department of International Liberal Arts, College of International Relations, Nihon University

ネシア人の多い地域ではあるが、日系人が数千人規模で集中している地域はない。一方で、スマトラ島においては、日系一世の時代から同島最大の都市、北スマトラ州の州都メダンに集住している。したがって、スマトラ島における日系一世は、その個人史的研究にとどまることなく、本稿第3節でみていく日本人会のように集団単位での考察が可能である。現在でも日系二世以降（日系二世590-670人、日系三世1,600-1,800人、日系四世620-700人、すべて概数）の大多数がメダンおよびその周辺で暮らしている⁶⁾。

本稿の構成は以下の通りである。第1節では、スマトラ島における残留日本兵および日系インドネシア人一世の概数を示す。加えて、日系一世はスマトラ島全土に分布していたことを示す。

第2節では、日系一世とインドネシア人女性との結婚に関して、とくにエスニック集団と配偶者選択との関連に着目して考察する。

第3節では、日系一世が異国の地で結束して生きるために、北スマトラ州各地で結成した3つの日本人会を取り上げ、それぞれの結成経緯や活動内容を報告する。

1 スマトラ島における残留日本兵および日系インドネシア人一世の概数

1-1 インドネシア全土

日本敗戦2日後の1945年8月17日、インドネシア共和国初代大統領であるスカルノが独立宣言文を読み上げ、再植民地化を図ろうとする旧宗主国オランダ軍・連合軍との4年半におよぶ独立戦争の火蓋が幕を開けた。このとき、インドネシア全土に陸軍・海軍併せておよそ29万の日本軍関係者が駐留しており⁷⁾、そのうちの800人から2,000人がインドネシア独立戦争に参加したと言われている⁸⁾。

彼らに残留を決意させた諸事由または残留せざるを得ない状況に至らせた諸事由は、単純にインドネシアへの愛着が生じていた、インドネシア人女性との間に子どもを儲けていた、あるいは結婚していた、戦犯や連合軍の捕虜になることを恐れた、逃亡兵・非国民の汚名で肉親に迷惑をかけたくない、肉親の死、祖国滅亡や引き揚げ船の襲撃といった流言飛語、大東亜戦争の義務を果たしたかった、インドネシア独立軍に拉致されていた、現地独立運動家に勧誘されたなど個々別々である⁹⁾。

1-2 スマトラ島

スマトラ島に残留し、インドネシア独立戦争に参

加した残留日本兵の数は、一説によると700人から800人である。日系一世らが福祉友の会¹⁰⁾の設立に動き出した1970年代中葉から彼らの間で、スマトラ島で残留を決意した一派を「スマトラ組」、ジャワ島で残留を決意した一派を「ジャワ組」と呼び合うようになったことからわかるように、インドネシアの日系一世は両島に二極集中している。

日系一世・中村常五郎氏（1924-2006）は、ジャーナリスト・青沼陽一郎氏とのインタビューで「最後に日本政府から、逃亡したあたし達に対して、帰国する気があるなら政府がすべてを負担する、と1953年に打診があった。逃亡した日本人は200人以上いて、そのときに3分の1くらいは日本へ帰ってる。それが我々逃亡兵に対しての最後の通達だった¹¹⁾」と語っている。中村氏の語りから、第二次世界大戦後スマトラ島に残留し、インドネシア独立戦争に貢献した残留日本兵700人から800人のうち、同独立戦争後の生存者は200人程であるということ、引き揚げ船による帰還者は65名前後であることがわかる。

一方、筆者が北スマトラ州で収集したデータおよび厚生省発行の『スマトラ地区未帰還者等名簿（附 残留邦人連名簿）¹²⁾と福祉友の会発行の残留者名簿¹³⁾から算出したところ、インドネシア独立達成後の生存者はおよそ200人、そして1950年代前半に帰国の途を選択した者が60人程であることがわかった。筆者の調査結果と中村氏の語りの内容における概数はほとんど一致する。

インドネシア独立後、スマトラ島北部のアチェ州および北スマトラ州で暮らした日系一世は、筆者が確認できている限りでは109人である。この数は、福祉友の会メダン支部作成の会員名簿に掲載されている106家族¹⁴⁾と、同会員名簿に記載されていない3家族とを足したものである¹⁵⁾。

他方で、筆者のフィールドワークの成果と福祉友の会が1995年に作成した『元日本軍人残留者名簿 ジャワ スマトラ バリ』を併せると、スマトラ島に残留した日系一世は、1995年時点では8州で構成されていた（現在は10州で構成）同島のリアウ州以外の南スマトラ州、西スマトラ州、ブンクル州といった州に散在していたことが確認できた¹⁶⁾。未婚のままスマトラ島外へ移住した若干名を除く一世が、最初に生活の拠点を築いた場所はリアウ州以外の7州のいずれかにおいてであり、1950年代から1980年代前半にかけて、主に仕事の関係でスマトラ島内では大都市メダンへ、島外ではジャワ島やカリマンタン島へ移住している。そのままスマトラ島のランブン州や

南スマトラ州に住み続けた一世もいた。

2010年12月にスマトラ島のある日系一世がメダン市内の病院で、2014年8月にジャワ島の小野盛(1919-2014)が亡くなったため、2017年現在、インドネシア全土で日系一世の生存者はいない。

2 インドネシア人女性との結婚

2-1 配偶者の人数とエスニック集団

日系インドネシア人一世の一部は日本占領時(1942/3~1945/8)に、大半はインドネシア独立戦争時と同国独立後にインドネシア人女性と結婚した。1930年代に仕事の関係で北スマトラ州にやって来ていた僅かの者は日本占領時代以前に家庭を築いていた¹⁷⁾。

これまで筆者が実施してきたフィールドワークより、スマトラ島の北スマトラ州およびアチェ州で生きた日系一世105人の配偶者の人数および配偶者の属するエスニック集団¹⁸⁾が明らかになった(表1参照)。

日系一世105人に対して、妻の数が123人となっているのは(表1参照)、日系一世105人のうち第2夫人までを持つ者が15人、第4夫人までを持つ者が1人いるからである。

日系一世の配偶者123人は16のエスニック集団から構成されている。ジャワ52人と華人系30人で全体の約70%を占める。以下、マンダイリン14人、アチェ8人、マナド4人、マライユ3人、カロとバンジャル2人、以下ミナンカバウ、アンボン、ガヨ、韓国、スندا、タミール、ニアス、バタウィ各1人ずつとなる(表1参照)。

表1 日系インドネシア人一世105人に対する妻123人のエスニック集団別人数

	エスニック集団	人数
1	ジャワ	52人
2	華人系	30人
3	マンダイリン	14人
4	アチェ	8人
5	マナド	4人
6	マライユ	3人
7	カロ	2人
8	バンジャル	2人
9	ミナンカバウ	1人
10	アンボン	1人
11	ガヨ	1人
12	韓国	1人
13	スندا	1人
14	タミール	1人
15	ニアス	1人
16	バタウィ	1人
合計		123人

(2010年4月から2011年3月のメダンにおけるフィールドワークの成果を基に筆者作成)

2-2 日系一世の配偶者にジャワ人が多い理由

日系一世105人の配偶者123人中ジャワ52人と全体のおよそ40%を占めることは、マンダイリン14人、アチェ8人なども基本的にはイスラーム教徒であるから宗教的な理由によるのではないと言える。

続いて、日系一世の配偶者にジャワ人が多い理由をエスニック集団の構成比から検討してみよう。北スマトラ州は元来マライユ人とバタック人¹⁹⁾の土地であり、西スマトラ州はミナンカバウ人の土地である。また、アチェ州²⁰⁾にはアチェ人やガヨ人が伝統的に暮らしている。このように、スマトラ島にはバタック人などの土着のエスニック集団が存在している。しかし、北スマトラ州のエスニック集団構成は、2000年時点でバタック42%、ジャワ32.6%、ニアス6.4%、マライユ5%、ミナンカバウ2.7%、バンジャル1%などと、ジャワ島出身のエスニック集団であるジャワ人の構成比が高くなっている²¹⁾。このように、日系一世の配偶者にジャワ人女性が多い理由は、エスニック集団の構成比から説明ができる。

北スマトラ州にジャワ人が多くやって来たのは、オランダ植民地時代の1863年に北スマトラ州の東海岸で開始された、タバコ、ゴム、コーヒー、紅茶などのプランテーション開発²²⁾が要因となっている。オランダ植民地政府は同地域の土着のエスニック集団バタック人やマライユ人などを従順でも勤勉でもない判断し、第一にマレーシアのペナン島あるいはシンガポールから中国人・華人系を、第二にジャワ島から大量のジャワ人を契約労働者(苦力労働者、クーリー)として呼び寄せた²³⁾。ジャワ人労働者のなかには、プランテーションからメダンやプマタン・シアンタルなどの都市部に渡った者がいた。

日系一世の妻にジャワ人の多い今一つの理由であるが、日本敗戦以前・以後もプランテーション労働者というジャワ人の社会的地位の低さが、残留日本兵という肩書の外国人との結婚を容易にさせたのだろう。その証左として、たとえば、キサラン農園での社会党の民兵組織プシンド(*Pemuda Sosialis Indonesia, Pesindo*)のトップはマンダイリン・バタック人、ダムリ農園のプシンドはバタック人とミナンカバウ人が率い、エック・カノパン農園での共産党はマライユ人の指導下にあった²⁴⁾。このように、北スマトラ州各地の土着のエスニック集団、バタック人や東海岸のマライユ人土候は、ジャワ人とは対照的に、社会的に権威のある地位を占めていた。

2-3 日系一世の配偶者に華人系インドネシア人が多い理由

日系インドネシア人一世105人のなかで華人系の女性と結婚した者は30人（全体のおよそ25%）である（表1参照）。華人系女性との婚姻が多いことには、以下のような5つの理由が考えられる。

一つ目は、華人系は外来の人々であるため、インドネシア社会内で似通った立場に位置付けられていた残留日本兵との結婚が多かったと考えられる。

二つ目は、日本占領下で身の安全を確保するためには、対日協力へと向かわざるを得ない²⁵⁾状況にあった華人系がいたからである。戦後もその名残があったとも考えられる。

三つ目は、宗教や食事などの文化的な面での類似性や身体的特徴、加えて同様の東アジアであるという親近感からではないだろうか。興味深いことに複婚または再婚をした一世15人の中には、一回目の結婚は、イスラーム教徒のジャワ人やミナンカバウ人との結婚であるが、二回目の結婚では、第2夫人を仏教徒の華人系女性としている者が5人いる。

四つ目は、経済活動には華人系とのつながりが欠かせない状況が関係していることである。インドネシア独立後に裸一貫で道を切り開こうとした日系一世が職を探したり、商売をはじめようとしたりする際に華人系とかかわる機会が多かった。華人系の経営するレストランや会社に雇用されていた一世の中にはイスラーム教徒もいたが、華人系に認められて結婚相手を紹介された者もいた。

秋野は日系一世のイスラーム教徒女性との結婚について、インドネシア独立軍のメンバーシップ獲得のためであり、またインドネシア化への「通過儀礼」である²⁶⁾と表現しているが、上記のような文脈においては仏教徒・華人系女性との結婚・複婚もまた（意図しなくとも結果として）一世の「通過儀礼」、「生存戦略」と捉えることができる。

2-4 日系一世の複婚・再婚の諸理由

日系インドネシア人一世が複婚または再婚をするに至った経緯は各々異なるだろうが、以下のような理由が挙げられる。

第一に、インドネシアへ日本商社の進出が本格化した1960年代後半以降に日系一世の経済的・社会的地位が向上したことによると考えられる。筆者は過去にメダンで数人の日系一世と交流があったというある日本人女性から「社交界のような場にはある程度の教養があり、マナーを心得たパートナーを連れ

て行かなくてはいけないでしょう」という内容の話をついたことがある。先に述べたように、日系一世の大多数はインドネシア独立戦争時と同国独立後に結婚した。敗戦国の残留兵・逃亡兵として、経済・教育の面で比較的水準の低い家庭出身の女性を娶った。

日系一世の配偶者選択に関係してくるため、当時のインドネシア人一般の日本・日本人に対する評価についても検討しておきたい。「日本軍がオランダとの戦いに勝利し（ジャワ島の）町に入った時、日本軍を一目見ようとインドネシア人が沿道に群れをなし、日の丸やインドネシア民族旗を振り、インドネシア民族歌を歌っていた。大歓迎はジャワ島だけでなく、インドネシア領内すべてで起こった²⁷⁾」という。

日本占領時、スマトラ北部においては「オランダを追っ払ってくれた日本人は恩人」と輪タクも食堂も金の受け取りを拒否する程に親日的であった²⁸⁾。また、乙戸は「戦時中は日本人であれば敬意を払ってもらえた。トアン（外国人男性への敬称）と呼ばれた。言葉ですら戦うときは日本語の号令で良かったんです。だからインドネシア語を覚えるのも遅かったですよ²⁹⁾」と当時のインドネシア人一般の日本人に対する対応を振り返る。残留日本兵と現地人女性との結婚は総じてインドネシア人から歓迎されたようで、結婚相手の女性やその家族にとってある種のステータスともなっていた面がある。

日本敗戦後では、スマトラ北部においては、親日的と言って良いかどうかは別として、日系一世ないし残留日本兵に対する現地人の見方は、連合国側に付くスルタンや華人系インドネシア人の存在、ならびに日本人に対して個人的な恨みを抱いていた者を除いて否定的ではなかったと捉えて問題はないだろう。アチェ州に駐屯していた総山孝雄氏(1916-2003)³⁰⁾が「あなた方日本人は、戦争に負けて大変お気の毒ですから、お金は要りません。無料で入ってください³¹⁾」と映画館に入る際の出来事を回想するように、日本人に対して同情の念も見られた。

しかし、結婚とまでなると「敗戦国の元兵士とどこの誰が結婚するのか」と言っていぶかるような社会的風潮が見られたようだ。日系一世・乙戸昇氏(1918-2000)³²⁾の「敗戦前に現地の女性と結婚した日本人は出自の確かな人と結ばれ、敗戦後に結ばれた場合は逆だ³³⁾」という持論からも当時の状況が認められる。

ただし、日系一世との出会いを経験したインドネ

シア人は、一世を同国独立に尽力してくれる心強い仲間として受け入れた。一世は異国の地で人情に触れ、ときに現地人女性と恋に落ちた。現に北スマトラ州のメダン、タンジュン・バライ、キサラン、プマタン・シアンタル、タパヌリなど、そしてアチェ州各地では、日系一世および残留日本兵の大多数はインドネシア人と良好な人間関係を築いていた。

このように、インドネシア人の日本に対する評価と日系一世および残留日本兵に対する評価とは異なり、日本占領時と日本敗戦後とではまた異なっていた。さらに地域によっても程度差があった。

日系一世が複婚や再婚した理由に話を戻すと、第二に、イスラーム教の一夫多妻制に則った結婚がある。日本商社に就職できた、ないしはドクトル・ジャパン³⁴⁾や商売で成功した日系一世の中でイスラーム教徒であった者、経済的・社会的地位を得た者は、社会的に認められた上で複婚をした。

第三に、戦時あるいはインドネシア独立後間もない混沌とした情勢の中で、また若さからか互いに互いの性格を見極めず結婚をしてしまい、しばらくして表面化してくる性格の不一致での離婚も大いに考えられる。

第四に、複婚をした日系一世の中には、第1夫人はイスラーム教徒であるが、第2夫人を仏教徒の華人系としている者が多い。文化的差異による離婚もあったと推察できる。

3 日本人会の結成

インドネシア独立後のおよそ20年間、日系ではないインドネシア人でさえも多くの場合、経済的に安定しなかったという時代に、日系インドネシア人一世たちはスマトラ島各地で日本人会を形成し、手を取り合い懸命に生きた。同じ日本人会に属していた一世同士が親友となり家族ぐるみの付き合いをする日系人家族もあった。そういった家族は二・三世の時代となった今日でも深交を維持している。

以下では、北スマトラ州各地で形成されていた日本人会を紹介する³⁵⁾。

3-1 2つのメダン日本人会

インドネシア独立達成後、アチェ州各地に残留していた日系インドネシア人一世・残留日本兵は、1950年12月から1951年10月にかけて、家族のある者は家族同伴で100人以上がメダンの宿舎2カ所に収容軟禁されていた。インドネシア国軍を除隊し、ないしは除隊を命ぜられ、各々がこれからの人生をどう生き

るか路頭に迷っていた矢先の出来事であった。

インドネシア政府は、日系一世を保護し、後には日本へ送還するという名目で、彼らをメダンに送った。政府と対立していたイスラーム勢力の行動に日本人が巻き込まれないための予防的措置ということであった³⁶⁾。倉沢は、教育出版センターから1980年に発行された早川清著『忘却の青春 インドネシア独立戦記』の329頁から引用して、「アチェ地区の日本人全員が共謀して政庁（アチェ州庁）の有力者を動かし、アチェ共和国を設立しようとしているという噂があり、その防止のために行った強制移送だったとも言われている」³⁷⁾としている。

当時、インドネシア政府はアチェ、東海岸州、タパヌリ州をまとめて北スマトラ州として併合しようと動き出していた。インドネシア政府はアチェの人々が州併合に抵抗するだろうと踏んでいた。早川が指摘するように、言わば戦争のプロフェッショナルである残留日本兵がアチェ独立運動に加担するのを恐れての措置であったと言えよう。実際に、北スマトラ州のメダンとその周辺やタパヌリなどに居住していた日系一世らは監視されることなく自由な生活を送っていたのであった。

日系一世らはこの軟禁収容中にメダン日本人会を結成した。同会会長を務めた日系一世・石井正治（1916-2002）は、同会結成の経緯を「100人を超す集団となつてはどうしても統率者が必要になってくる。何れ強制送還されるものならば、立つ鳥跡を濁さず、ということもあり、日本人は日本人らしく秩序統制ある行動をとろう、その為に会長・幹部を選出し日本人会を結成することになった」³⁸⁾と述懐している。軟禁収容からの解放は1951年の暮れの時期であり、残留日本兵の故国引揚げ業務の終了と同時に、本来の役目を終えた日本人会は解散した³⁹⁾。

上述のメダン日本人会が解散して間もなく、日系一世らによって蘇島棉蘭日本人会（以下、スマトラ・メダン日本人会）が結成され、彼らはこれを「メダン日本人会」と呼んだ。一世らはインドネシア語、仕事、法的身分といった生活のあらゆる面で問題を抱えていたので、それらを処理するには個人ではなく団結した方が有利であるとの、日系一世共通の問題に対応すべく結成されたのであった。

スマトラ・メダン日本人会は、忘年会や新年会をメダン市内にあるホテルで開催し、日本人墓地の清掃、盆の時期には慰霊祭を催した⁴⁰⁾。

福祉友の会メダン支部に保存されている日系一世らの写真から、スマトラ・メダン日本人会の会員数

および同会の諸活動への参加者のおおよその数が確認できる。写真1は、1954年8月9日に撮影された日系一世45人および日系二世1人の集合写真である。1954年当時の同会の構成員は、この45人に数人を足した程度であったと見積ることができる。



写真1 スマトラ・メダン日本人会1

(日系インドネシア人二世U氏提供)



写真2 スマトラ・メダン日本人会2

(福祉友の会メダン支部事務所の壁に飾られている写真を筆者撮影、2009年2月)

写真2は忘年会に撮影された一世19人の記念写真である。加えて、どのような目的で集まったのかは不明だが一世31人が映っている写真もある。写真2が示すように、スマトラ・メダン日本人会の諸行事への参加者は常々20人から30人であった。

日系一世の中には同会に属してはいたものの、同会の諸活動に参加しない者がいた一方で、ビンジャイヤプマタン・シアンタルなど、さらにタバヌリヤアチェ州といった遠方から諸活動に参加する一世がいた。

1960年12月、メダンに戦後初めてとなる日本総領

事が着任した。新領事の存在は一世らにとってこの上ない朗報であったに違いないが、ABC問題の浮上により、日本人会結成の目的に反するとのことで、スマトラ・メダン日本人会は解散を余儀なくされた。ABCとは、A、永住しても日本・インドネシア両国に有益である、B、永住しても日本・インドネシア両国に有益ではないにしても迷惑はかけない、C、帰国させた方がよい、と総領事館が一世らを色分けしたことである⁴¹⁾。どのような経緯または狙いがあったABC問題が生じたのかは確認できていないが、日本側は日系一世らのインドネシアへの完全な同化を望んでいたと踏んでも見当違いとはならないだろう。

3-2 シアンタル日本人会⁴²⁾

ある日系インドネシア人一世の手記によると、蘇島先達日本人會（以下、シアンタル日本人会）は、16人の日系一世によって1956年10月10日に結成された。結成当時は、日系一世16人とその配偶者14人に加えて、日系二世20人の計50人の日本人会であった。彼らの居住地はシアンタルだけでなく、たとえばシマルングン県ハトンドゥハン郡タンガ・バトゥ村や同県ジャワ高地郡バリムビンガン村の居住者がいたというように、シアンタルおよびその周辺におよんでいた。

シアンタルにはインドネシア独立以前すでに家庭を築いた日系一世がいたようだが、なぜ同地域に多くの日系一世が集まって来たのか。シアンタルは日本軍の集結地点に指定されていたため、日本の敗戦から間もなく、アチェ州のムラボーに駐屯していたおよそ400人の日本兵がシアンタルへ向かった⁴³⁾。また、第二次世界大戦中メダンに置かれていた近衛師団司令部は1945年10月末にシアンタルのマリハット農園へ移駐された⁴⁴⁾。加えて、1945年11月から翌年3月までシアンタルから30kmほど離れた山中にあったクーリーの村落に身を隠した部隊もあった⁴⁵⁾。シアンタルに限らず、日系一世の多くは駐屯地周辺の集落の人々との交流を深め、親朋の間柄になる者も少なくなかった。

1951年に多くの日系一世が軟禁収容のため貨物列車に乗せられて、アチェ東部からメダンへ運ばれてくる途中、列車の速度が落ちた瞬間に日系一世3人が飛び降り、逃亡を図った。そして、シアンタルへと辿り着き、森に隠れて暮らした。この逸話はメダンの日系一・二世の間でよく知られている。この3人に加えて、スマトラ島とくに北部各地でインドネシア独立を迎えた一世らが、日本軍の集結地点・近

衛師団司令部としてのシアンタルへ、縁故のあるシアンタルへ集まって来た、と考えるのが妥当であろう。

シアンタル日本人会所属の日系一世16人の職業は、14人が自動車やモーターバイクなどの修理、鉄工、木工のいずれかの仕事に従事していた。その他2人は、華人系インドネシア人の所有する会社の支店長、精米所の経営者であった。

同日本人会の日系一世らは、休日になると誰かしらの家に集い、酒を飲み交わしては軍歌を歌い、日本語で語り合いながら朝まで過ごしていた。日系二世男性Aは「軍人上がりのせいか、酒を飲むと取っ組み合いの喧嘩なんてしょっちゅうでした」と父親たちの当時の様子を語ってくれた⁴⁶⁾。

また、子ども、日系二世が生まれると互いにお金を出し合ったり、食べ物を譲り合ったり、配偶者の紹介や国際結婚・異文化結婚から生じる夫婦間の問題について話し合ったりした。さらに、メンバーのなかには2人で修理工を営んだ者がいたように、生活のあらゆる面で助け合って生きた。

シアンタル日本人会の構成員は1960年代から徐々に、メダンへ移住するようになる。シアンタルで一時期を過ごし、その後タンジュン・プラなどへ移住した日系人家族もいた。1990年代後半までには大多数が各々別個に移住し、現在ではシアンタルに住む日系人は2家族だけである。

シアンタル日本人会の解散時期は、日系二世らに尋ねても誰も答えられないことから、日系一世ら各々の移住によって自然に解散していったと推察される。

おわりに

本稿では、第二次世界大戦終了後に、ある者は自らの意思で、ある者は自らの意思に反してインドネシアに残留し、同国独立戦争に参加し、そしてその後同国のスマトラ島で日系インドネシア人一世として生きた日本人の姿を記述した。

第一節では、スマトラ島における残留日本兵および日系インドネシア人一世の概数や居住地域を示した。インドネシア独立後、スマトラ島ではおよそ140人の日系インドネシア人一世が新たな人生を歩んだ。彼らの居住地域は、主に北スマトラ州のメダンとその周辺であった。次に多い地域がアチェ州と北スマトラ州南部のタパヌリであった。他にはランブン州やブンクル州などにそれぞれ1人から数人の日系一世が暮らしていた。

第二節では、日系一世の現地人女性との結婚について、一世の妻のエスニック集団の多様性や一世の複婚・再婚といった事柄を通して考察した。

日系インドネシア人一世の配偶者のエスニック集団と宗教は多様であるが⁴⁷⁾、日系一世はほとんど全員が生粋の日本人である（台湾出身者も含まれる）。また、日系一世は出身地や軍人時代の所属部隊や階級が異なれ、第二次世界大戦、インドネシア独立戦争とおよそ10年も戦争に身を投じた戦友である。かつインドネシアに残留した経緯はそれぞれ異なるものの、祖国を捨て異国の地で人生を送った盟友である。また、非国民や逃亡兵といった汚名に悩まされた者も多かっただろう。このように、残留日本兵から日系一世となった日本人たちには共通の体験が多く見いだされる。第二節でみてきたインドネシア人女性との結婚もその一つである。

第三節では、北スマトラ州各地で日系一世によって結成された小規模な日本人会を3つ紹介した。日系一世は、経済的に困難な状況下でインドネシア社会・文化への同化を試みなくてはならないなか、メダンやシアンタルなどにおいて小規模な日本人会を組織し、結束して生きたのであった。これらは、日系一世同士が異国の地で相互扶助を行うために、また互いの存在を認識し合い、情緒的結束を補うような目的で結成された。また、日本人会の諸行事はインドネシア社会・文化に生きる日系一世に日本人であることを再確認させる機能があったと考えられる。

乙戸氏が指摘するように、福祉友の会設立の1979年以前に組織された非公式の日本人会は確かに脆弱であった⁴⁸⁾。しかしながら、北スマトラ州各地で組織された諸日本人会は、インドネシア独立から福祉友の会メダン支部設立までのおよそ30年間、日系一世らにとって欠かせない存在であった。日系インドネシア人の互助組織である福祉友の会メダン支部が結成されるまで、一世間で培った交友関係と第三節で紹介した小規模な日本人会以外に彼らの紐帯的役割を果たすものが存在しなかったからである。つまり、諸日本人会は、残留日本兵から日系インドネシア人となっていく過程において必要不可欠な存在であったと言えよう。

注

- 1) 日系インドネシア人一世のなかにはインドネシアに直接派兵された者だけでなく、隣国から除隊後に同島へ流れてきた者も含まれる。たと

えば、中国に派兵されその後、マレーシアなどで連戦、そしてシンガポール経由でスマトラ島に上陸した者や、戦時ないし日本敗戦後にインドネシアのジャワ島やアンボン島からスマトラ島に移動してきた者もいた。

- 2) 本稿では、日系インドネシア人一世もしくは日系一世と残留日本兵という用語を文脈に応じて使い分ける。前者と後者の共通点は、日本敗戦後に何らかの理由から帰国せず／帰国できず、インドネシア独立戦争に関わった日本人であるという点である。相違点は、前者はインドネシア独立達成後も日本に帰国せずインドネシアで生き続けた日本人、後者は同国独立後1950年代半ばまでに引揚げ船で帰国した日本人であるという点である。したがって、後者・残留日本兵と表記した場合、前者・日系インドネシア人一世が含まれる。
- 3) 本稿では、便宜的に日系インドネシア人一世または日系一世と呼称するが、インドネシア社会の文脈からすれば、彼らをオラン・ジャパン (*orang Jepang*, インドネシア語で日本人の意) と呼称するべきだろう。というのも、インドネシア、少なくとも北スマトラ州において、日系ではないインドネシア人は、日系インドネシア人一世のことをオラン・ジャパンと呼んでいたからである。また、他者からの名づけによって日系一世らも自分たちをオラン・ジャパンと範疇化していたと推測できるからである。したがって、本稿の副題のように残留日本兵から日系インドネシア人になったのではなく、厳密に言えば残留日本兵からオラン・ジャパン、換言すれば「エスニックな日本人」になったと言える。
- 4) 日系インドネシア人一世がインドネシアのスマトラ島でどのように生きたのかは、第二次世界大戦時またはインドネシア独立戦争時の改宗と改名、1960年代前半のインドネシア国籍取得、1970年代後半の福祉友の会（日系人組織）設立とその後の生活、1960年代から1990年代までの北スマトラ州メダンへの移住など、様々な側面から考察が可能である。本稿では紙幅の関係から、現地人女性との結婚と日本人会の結成の2点に絞った。
- 5) 日系インドネシア人一世に関する研究は、伊藤雅俊（2013）「交友関係にみる日系インドネシア人社会の形成過程 日系アイデンティティに関する一考察」『移民研究年報』第21号、107-118

頁、同上（2016）「日系インドネシア人一世の北スマトラ州メダンへの集住過程」『国際文化表現研究』第12号、425-436頁、林英一（2007）『残留日本兵の真実 インドネシア独立戦争を戦った男たちの記録』作品社、同上（2009）『東部ジャワの日本人部隊 インドネシア残留兵を率いた三人の男』作品社、同上（2010）『南方軍政関係史料④ インドネシア残留日本兵の社会史 ラフマツト・小野盛自叙伝』龍溪書舎、同上（2011）『皇軍兵士とインドネシア独立戦争 ある残留日本人の生涯』吉川弘文館が挙げられる。

- 6) 伊藤雅俊（2013）、前掲書、108頁
- 7) 川田文子（1997）『インドネシアの「慰安婦」』明石書店、174頁
- 8) 青沼陽一郎（2006）『帰還せず 残留日本兵六〇年目の証言』新潮社、173-174頁、乙戸昇（1986）『月報』No.55:4頁
- 9) 残留日本兵がインドネシア残留を決意した諸事由については、秋野晃司（1988）「日系インドネシア人の軌跡 Life Historyに関する調査報告」『社会科学ジャーナル』26(2):101-112、倉沢愛子（2011）『戦後日本＝インドネシア関係史』草思社、後藤乾一（2002）「元日本兵クンプル乙戸（1918～2000年）と戦後インドネシア」『アジア太平洋討究』早稲田大アジア太平洋研究センター、4:49-63頁、長洋弘（2007）『インドネシア残留元日本兵を訪ねて』社会評論社、福祉友の会（2005）『インドネシア独立戦争に参加した『帰らなかった日本兵』、一千名の声—福祉友の会・200号『月報』抜粋集一』に詳しい。
- 10) 福祉友の会（インドネシア語では *Yayasan Warga Persahabatan; YWP*）は、日系インドネシア人一世の親睦および相互扶助を目的として1979年に設立された、インドネシア全国規模の日系人組織である。本部はジャカルタ、支部はスラバヤとメダンに設置された。日系人は同組織を *Yayasan* ないし *YWP* と呼ぶ。
- 11) 青沼陽一郎、前掲書、241頁
- 12) 厚生省（1958）『スマトラ地区未帰還者等名簿（附 残留邦人連名簿）』
- 13) 福祉友の会、前掲書、383-397頁
- 14) *Yayasan Warga Persahabatan Cabang Medan*（2007-2010）*Daftar Keluarga*.
- 15) スマトラ島南部における日系人は、福祉友の会メダン支部よりも距離的に近いジャカルタ本部の会員名簿に登録されている可能性がある。

- 16) 福祉友の会 (1995)『元日本軍人残留者名簿 ジャワ スマトラ バリ (Yayasan Warga Persahabatan Dafter Issei Hidup Tahun 1995)』5-6頁
- 17) 戦前に仕事の関係で北スマトラ州やアチェ州にやって来て、インドネシア独立戦争に参加した一般邦人もいる (戦争にかかわらなかった者もいる)。これまで日系インドネシア人というと、日本軍および軍関係者としてインドネシアへ渡り、日本敗戦後も帰国を選択せず、インドネシア独立戦争に参加した残留日本兵と一括して見られがちであった。彼らは結果として残留日本兵となったのだが、一般邦人として入国したのか、それとも日本軍関係者として入国したのか、の2つのパターンがある。前者も福祉友の会メダン支部の会員名簿に記載されているし、現地の日系人らも前者および前者の子孫を仲間として認めている。
- 18) インドネシアにおいて、土着のジャワ人やアチェ人などはエスニック集団としてカテゴライズされるが、華人系やタミール人など外来の人々はエスニック集団とは見なされない。しかし本稿では華人系などもエスニック集団として一括して扱う。
- 19) バタック人は、アンコラ・シピロ (Angkola Sipirok)、ダイリ・パクパク (Dairi Pakpak)、カロ (Karo)、マンダイリン (Mangdailing)、シマルングン (Simelungun)、トバ (Toba) の6つの亜種族・亜言語に大別される。Rogers, Susan (1993) "Batak" *Encyclopedia of World Cultures Volume 5 East and Southeast Asia*, Paul Hockings Volume Editor G. K Hall & Co. Boston, Massachusetts David Levinson Editor of Chief, pp38.
- 20) 2000年時点で、アチェ州のエスニック集団構成は、アチェ人が50.3%と半数を占め、以下ジャワ人16%、ガヨ人11.5%、アラス人3.9%、シンキル人2.6%、シムルー人2.5%などとなっている。Suryadinata (ed) (2003) *Indonesian's Population: Ethnicity and Religion in a Changing Political Landscape*, Institute of Southeast Asian Studies, pp15.
- 21) Suryadinata (ed)、前掲書、pp19.
- 22) オランダ植民地時代の1863年に北スマトラ州の東海岸においてタバコ・プランテーション開発が開始された。1890年になるとその数はタバコだけでなくゴムや油やしなども含めて170に増大、最終的に256に達した。プランテーション地帯は、北はアチェ、西にタパヌリ高地とカロ高地、東はマラッカ海峡に面しており、内陸に50-70kmの幅、南北250kmに伸び、総面積は70万haにも及ぶ
- 23) Wolfram Seifert, Ursel (1987) *The Urban Area of Medan Growth, Development and Planning Implications*. Carle, Rainer(ed). *Cultures and Societies in North Sumatra*. Veröffentlichungen des Seminars für Indonesische und Südseesprachen der Universität Hamburg, Vol 19. Berlin/Hamburg Dietrich Reimer Verlag. pp469-470.
- 24) ストローラー, アン・ローラ、中島成久訳 (2007)『プランテーションの社会史 デリ/1870-1979』法政大学出版局、150頁(原書Stoler, Ann Laura(1985) *Capitalism and Confrontation in Sumatra's Plantation Belt*, 1987-1979. New Haven: Yale University Press.
- 25) 倉沢愛子 (2005)「インドネシアにおける対日歴史認識」『国際問題』財団法人日本国際問題研究所、549:67頁
- 26) 秋野晃司、前掲書、108頁
- 27) カナハレ, ジョージ、後藤乾一・白石愛子・近藤正臣訳 (1977)『日本軍政とインドネシア独立』鳳出版、35頁 (原書Kanahele, George Hu'eu Sanford(1967) *The Japanese occupation of Indonesia: prelude to independence*. Ph. D. dissertation. Cornell University Microfilms.
- 28) 『産経新聞』1994年8月24日「戦後史開封150 未帰還兵2」
- 29) 白河桃子 (2001)「遅れてきた日本人 インドネシア残留兵の死」『福祉友の会会報』9:3頁
- 30) 総山孝雄氏は、陸軍大尉通信将校としてスマトラ北部に駐留。日本敗戦後、近衛第2師団渉外部に任命され、連合軍やインドネシアとの交渉にあたる。1946年7月にベラワン港より復員船で出港、翌月無事に内地へ帰還。
- 31) 総山孝雄、前掲書、20頁
- 32) 日系一世・乙戸昇は1957年にジャカルタに移住するまでスマトラ北部各地で過ごした。両地域で多くの友人に恵まれていた。
- 33) 上坂冬子 (1997)『南の祖国に生きて インドネシア残留日本兵とその子供たち』文藝春秋、201頁
- 34) ドクトル・ジャパン (インドネシア語で *mantri kesehatan doktor Jepang*、通称ドクトル・ジャパン) は正式な医師免許を備えた職種ではない。日本軍時代に学んだ僅かな医学知識や医学書を読み漁って診療所開業・往診を行った。

- 35) 以下で紹介する3つの日本人会以外に、北スマトラ州南部に位置するタパヌリ地区においてタパヌリ川日本人会が結成されていたことを確認している。
- 36) 倉沢愛子、前掲書、139頁
- 37) 倉沢愛子、前掲書、139頁
- 38) 石井正治 (1987)「インドネシア残留兵の記録 メダン日本人会」『月報』No.68:2頁
- 39) 石井正治、前掲書、2-4頁
- 40) 戦前は当時のメダン日本人会(Medan Japan Club)、一般在留邦人らが墓地の維持・管理にあたり、毎年盆には堤灯を飾り付け、盛大な慰霊祭を実施していた。しかし、1951年以降はアチェからメダンに護送された、あるいはアチェ以外の地域からメダンに集結した日系一世および残留日本兵らが墓地を清掃して慰霊祭を執り行うようになった。
- 41) 弘田実 (1991)「メダン日本人墓地について」『月報』No.116:2頁
- 42) プマタン・シアンタルは、北スマトラ州でメダンに次いで第二の都市である。メダンより南東に約130km、本稿ではシアンタルと表記する。
- 43) 上坂冬子、前掲書、35頁
- 44) 総山孝雄 (1992)『インドネシアの独立と日本人の心』展転社、97頁
- 45) 草間廣 (2010)『南暎の果てに インドネシア・マレーシア・シンガポールの軌跡』信毎書籍出版センター、77-78頁
- 46) 日系インドネシア人二世男性A、メダンにて、筆者による聞き取り調査、2009年2月19日
- 47) 本稿では触れないが、日系インドネシア人一世の多くは結婚前に改宗と改名を行っていた。なかでもイスラーム教への改宗とイスラーム名への改名が多かった。
- 48) 乙戸昇 (1989)「ヤヤサン・福祉友の会設立迄の歩み」『月報』No.87:5頁